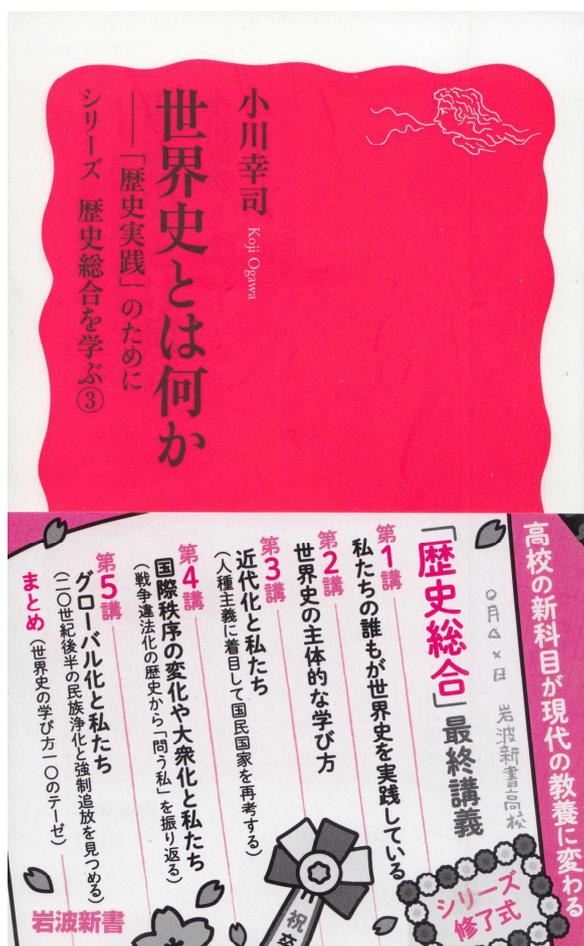


新しい「歴史総合」としてのオペラ

高校の新科目「歴史総合」に学ぶ

2023/07/23



A先生からの「寄贈本」

一週間前のことです。名古屋モーツァルト協会の会員で、いつもお教をを乞うている元校長のA先生から、また、新しいご本を贈られました。小川幸司先生の『世界史とは何か—「歴史実践」のために』(岩波新書)です。「シリーズ歴史総合を学ぶ」の中の第3巻です。小川幸司先生は、現役の高校の歴史の先生です。この3月までは長野県の蘇南高校(A先生の母校)の校長先生だったのですが、直接、生徒に歴史の授業をするために、自ら、校長から教諭に降任した方です。前例のないことだそうです。その小川先生とご親交をも

たれたA先生が、この小川先生の新刊をお読みになって感銘を受け、わざわざ、長野まで行って小川先生にお会いになり、「色々貴重なお話をうかがった。ぜひ、あなたにも読んでいただきたい」と贈って下さったのです。それで、直ぐに読み始めました。6頁に来て、突然、強い衝撃を受けました。教員七年目の小川幸司先生が、高校の歴史の先生として赴任なさっておいでだったが長野県の松本市の松本深志高校でした。そのとき、1994年6月27日に「松本サリン事件」が起きました。松本深志高校は、そのサリン事件の現場からわずか1キロほどのところにありました。

松本サリン事件

松本サリン事件は、原因不明の毒ガスで8名の死者と約600人の重軽傷者が出た大惨事でした。

この大量殺人は、のちに人々から松本サリン事件と呼ばれます。しかし当初は、サリンが原因であることも、実行犯がオウム真理教幹部であることも不明でした。警察とマスコミは、駐車場に隣接する屋敷に住む会社員・河野義行さんが、薬品の調合を誤って毒ガスを発生させてしまったと考えました。事件の二日後の六月二九日の『信濃毎日新聞』夕刊には、「第一通報者の会社員」が事件発生直後、娘に対して「大きいことになるので覚悟しておけ」と語り、事件への直接関与をほのめかしたことが報道されました。マスコミ各社の報道は過熱の一途をたどります。妻が意識不明の重篤な状態に陥っており、自身と三人の子どもたちにも中毒症状が出ているにもかかわらず、河野さんと子どもたちは、警察による執拗な取り調べを受け、日本全国からの誹謗中傷にさらされました。 [3頁]

ここから、日本犯罪史上、凶悪な「テロ事件」と新たな「冤罪事件」がうまれました。「松本サリン事件」から半年経った翌1995年の初めに富士河口湖畔のオウム真理教の施設の付近の土壌からサリンの残留物が検出された新聞が報じました。松本サリン事件も新たな段階を迎えました。つづく3月20日に、東京都心の五つの地下鉄でサリンが撒かれ、新たに13名の死者と6000名以上の重軽傷者が出ました。ここで犯人とされてきた河野義行さんの疑いは晴れました。それで、歴史の教師をしておいでの小川先生は、授業で、歴史的な「事実」とはなにかを問題にしました。そして、以前から深志高校にあった図書館ゼミナールという生徒たちの自主活動で、探求テーマを定めて学習会行うようにしました。

実は、こうした複数の図書館ゼミをまとめていた生徒が、河野さんでした。この間、一家でサリンの深刻な被害を受けながら、冤罪（えんざい）に苦しんできた河野義行さんの長女です。 [6頁]

これを読んだとき、なにかが胸に迫って、涙がでました。

いまだ警察が冤罪を認めていないなか、そして母親が事件以来ずっと意識不明であるなか、河野さんは背筋を伸ばして毎日登校し、図書館で好きな本のことを語り合っていました。彼女の姿を思い出すたびに、私は今でも胸がいっぱいになります。 [同]

小川幸司先生は、この長女の健気さに、私以上に強い衝撃をお受けになられたことでしょう。

松本深志高校も含めた、河野家の三人の子どもが通う三つの学校では、事件直後から「まだなにもはっきりしていないのだから三人にはいつもと同じように接するようにしよう」という方針に徹していました。松本深志高校の薬品庫も警察の捜索対象になっていましたから、「いつもと同じように」とは、心してそうした姿勢を創ることでようやく実現するものでした。〔7頁〕

A先生へのお礼と感想のメール

それで、感動のあまり早速、（直接小川先生にではなく）ご本をお贈り下さったA先生にメールをでお礼と感想をお送りしました。

ご尊敬申し上げますA先生 こんにちは。驚きました。素晴らしいご本とA先生の直接のご紹介文に感動しました。小川幸司先生に会いに行かれたのですね。さすが、行動的なA先生です。すぐに読み始めました。最初の第1講から涙が出ました。それは、そこに書かれていた「松本サリン事件」については、私には私なりの自負があったからです。最初から冤罪であることが分かっていたからです。それは、NHKのニュースで専門家の立場から東大の科学の先生が「サリンは大きな生産工場が必要です。個人ではとても作れません」と発言したときでした。当時は、河野さんの池にザリガニが一匹死んでいるのも犯人の証拠とされていました。この本で、松本サリン事件の主犯とされた河野義行さんの長女が小川幸司先生の生徒として登場したときには感極まりました。6頁です。

誰もがみんな、東大の先生の話聞いていないのです。なんという非科学的な国民でしょう。こういった人たちを相手にしては無実の立場の河野さんのお嬢さんは絶望したことでしょう。お気の毒でしかたがありません。案の定、真犯人の浅原彰晃が建設中のサリン製造工場の規模は大きなものでした。小川幸司先生は、ここで、「早期の逮捕や詳細な報道を煽り立てた私たちの存在」を論理的整合性から論じる必要性を強調しておいでです。20頁です。「ロシア×ウクライナ」問題にも触れておいでです。ここでも、また、「私たちの存在」が問われることでしょう。いままだ、読み進めています。また、メール、さし上げます。ただ、私を選んでこのご本をお送り下さったA先生のご温情に深く感謝いたします。ありがとうございました。

都築正道

A先生は、私のこの文を小川幸司先生に転送して下さいました。小川先生からは、直接、ご丁寧なメールをいただきました。感激しました。その小川先生のメールの中に、生徒を連れてウィーンへ行き、オペラ座とモーツァルトのお墓を訪問したと記されていました。嬉しかったです。それで、名古屋モーツァルト協会の顧問をしていることと例会の発表でモーツァルトのオペラについて「対談」を行い、教科書まで作ったこととお知らせして、ご迷惑とは思いましたが、《フィガロの結婚》と《魔笛》の教科書を送らせていただきました。

今日も一日、先生のご著書を読み直し、ノートをとって過ごしました。充実した素晴らしい一日を過ごすことが出来ました。また、本日、お送りさせていただきました二冊の冊子は、先生のご著書を読む前のものですので、間違いと独断と誤解と「非ファクト」ばかりだと恥じております。今後は、このノートを元に、また、新しい、間違いのない、対話をふくめた「オペラ論」を展開できるものと勇んでおります。A先生共々、今後とも、よろしく、ご指導いただきますようお願いいたします。

真の総合芸術としての楽劇

さて、そこで、小川先生に誓った間違いと独断と誤解と「非ファクト」のない「新しいオペラの美学」の構築ですが、小川先生のご著書が「歴史総合」の紹介の書でもありましたので、「歴史総合としてのオペラ」を目指すものとししました。「オペラから歴史を学ぼう」ということです。

しかし、ここで注意しておかなければならないのは、小川先生がおっしゃる「歴史学」は、宗教やイデオロギーや芸術とは明確に区別された「客観的な科学のひとつ」であると言うことです。(53頁)

でも、「歴史学」とは区別されている芸術であるオペラにも、歴史的な部分があります。オペラも、必然的に、三度、歴史を語っているからです。以前から私は、オペラ作品を紹介するとき、先ず、「オペラ三つの時代」を設定しました。オペラの「題材(原作)が語る時代」と「初演された時代」と「鑑賞している時代(現代)」です。モーツァルトの歌芝居《魔笛》でいえば、「神話と魔法と建国の時代の物語」を、「18世紀の革命の時代の人々」のために上演して、それを、私たち、「虚報と人工知能と亡国の現代の人々」が観るのです。ここに、鑑賞者と歴史との出会いが、3回行われるのです。

歴史実践としてのオペラ

なにごとにも、「問題設定」がまず必要です。主題は、新しい「オペラの美学」の確立です。これまでの私のオペラの解説は、主にオペラを楽しむために、面白おかしく、分かり易く書いていました。でも、「歴史総合のオペラ」は違います。オペラは、社会に対してなにか意見があるだれかが書き、それをだれかが上演し、それをだれかが観て、人々を新しい社会の創造に向かわせるものでなければなりません。すなわち、小川先生がおっしゃる「歴史実践」です。「歴史実践」とは、文化人類学者の穂刈實の著から引用して、「日常実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」のことです。(29頁) 少々、広すぎる定義ですが、観ている観客が歴史実践を行えば、オペラでも、「歴史学」は可能なのだと解釈して、「オペラによる歴史総合」を実証したいのです。これが、私の、今回の、「問題設定」です。

この「歴史実践」は、次のような六つの段階を踏んで行われると小川先生はいいます。

歴史実践＝歴史実証・歴史解釈・歴史批評・歴史叙述(探求された歴史)・歴史対話・歴史創造 (60頁)

歴史実践としてのオペラ

オペラによって歴史実践を行うためには、具体的に、どういった段階が可能なのでしょうか。それは、以下のように考えます。

A 【歴史実証】 問題設定にもとづき、諸種の史料の記述を検討(史料批判・照合・解釈)することにより、「事実の探究」(確認・復元・推測)を行う。

「ファクト」(真の歴史的史料)の取得です。《魔笛》の初演は、どうなされたか？ それを知るには、モーツァルトの《魔笛》の舞台上演の版画は優れた「史料」だといえましょう。写真のない時代、これらの版画から、ウソを排除し、真の意味を見いだすことが、ヘーゲルの言う「歴史は『なされたこと』を意味すると同時に、『なされたことの物語』も意味する」という歴史事実の要諦(ようてい:肝心なところ)を確立するものなのですから。

また、この「諸種の史料の記述」とは、オペラの台詞の部分の解釈と全体の構成にかかわるものでもあります。「ト書き」の部分も含めて、台本をよく読んで、主人公たちの主張を理解することです。そして、どんな「事件」に出遭い、主張がどう変更されたかを知ることです。また、「構成」とは、オペラは、音楽と劇でできています。どの箇所が歌が歌われ、どの箇所が台詞が述べられるかが、構成上、大きな問題です。主人公たちが歌う歌や合唱は、劇が、明らかにクライマックスを迎える時に歌われます。その歌によって、劇が急転換するのです。

また、モーツァルト自身の手紙や関係者たちの手紙、初演のときの新聞の批評や、ゲテをはじめとする文化人たちの感想なども、「諸種の史料の記述」です。特に、《魔笛》初演時に、モーツァルトが妻のコンスタンツェに宛てて書いた手紙は貴重です。コンスタンツェは、病氣療養のためにウィーン近郊の温泉地バーデンにいたので、モーツァルトは毎日のように手紙を書いて初演の様態を伝えています。特に、「嬉しかったのは静かな喝采だ」は、モーツァルトは《魔笛》を謎のオペラとして上演したことを教えてくれる貴重な資料です。

- B 【歴史解釈】 事実間の原因と結果のありよう(因果関係)やつながり(連関性・構造化)、そして比較したときに浮かび上がるありよう(類似性・相違性)について、問題設定に関わる仮説を構築することにより、「連関・構造の探究」を行う。

なぜ、モーツァルトは《魔笛》を書き、初演したのか？ それを検討する規準として、次のことが「事実」として考えられます。まず《魔笛》が、当時の他のオペラと違って、①誰にでも分かるドイツ語で書かれていること。②場末の劇場で庶民相手に上演したこと。③内容が親しみやすいお伽噺であること。④愉快的な台詞に楽しい歌も入った歌芝居であること。⑤庶民の幸せな生活についての象徴的なシーンが多いこと。⑥正義と平等の社会の仕組みが感じられること — など、などです。

- C 【歴史批評】 その歴史解釈にもとづき、より長い時間軸やより広い空間軸においてみたときの意義や、現代の世界に対する意義について、「意味の探究」を行う。

それで、先に述べたように、オペラを観るときには、先ず、「オペラ三つの時代」を設定しました。

そして、現代においては、世界中のオペラ座で、色々な演出家による《魔笛》が上演され、また、色々なDVDも数多く観ることができます。数多くある《魔笛》の上演はそれぞれに、この歌芝居が現代に与える意義についての「歴史批評」の表明であるのです。

- D 【歴史叙述】 歴史解釈や歴史批評を論理的・効果的に表現する「叙述の探究」を行

う。

台本を書いたシカネーダや劇場を共同経営していたヨーゼフ・フォン・バイエンフェルトたちによる《魔笛》の上演に関する史料はほとんど残っていません。20世紀の音楽学者ゲルノート・グルーバーが精緻に調べた《魔笛》の記録などが研究の対象になっています。グルーバーが、《魔笛》の初演時の楽譜を印刷した印刷屋のアルベルティの楽譜とモーツァルトの自筆譜を比べて、約50箇所が台本が違っていることを指摘しています。

また、19世紀後半に書かれたオーストリアの研究家エーゴン・フォン・コモルツェンスキの論文は、台本作者はシカネーダだと断定している論文などがあります。

でも、いずれも、《魔笛》初演の1791年から200年以上が経っています。「叙述の探求」は大いに必要です。でも、もう、これ以上、新しい史料の発見は期待出来ません。《魔笛》の場合、特に、【歴史解釈】と【歴史批判】が重きをなします。

- E 【歴史対話】 以上の営みについて事実立脚性と論理整合性にもとづいて検証を重ね、特に歴史実証の矛盾や歴史解釈の矛盾のうえに歴史批評や歴史叙述が行われていないか、歴史批評や歴史叙述のありかたが歴史実証・歴史解釈を歪めていないかなどを、他者との協働によって考察することにより、「検証の探究」を行う。

これは、オペラ上演時の演出家の「読み替え」に当たります。物語の原作の時代を現代に置き換えて演出することがそれです。ワーグナーの《ニーベルングの指環》において、世界を征服できる黄金の指環を原子爆弾に置き換えることなどです。その賛・否についての討論を行います。

- F 【歴史創造】 歴史を参照しながら、自分の生きている位置を見定め、自分の進むべき道を選択し、自らが歴史主体として生きることにより、「行為の探究」を行う。

オペラに興味を持った人たちが集まる文化講座で、大勢が映像を観ながら一緒に一つの傑作オペラを鑑賞することによって、現代に生きるお互いが、自説や持論を述べ合うのです。そのときに必要なのは、正しい「問題設定」です。このオペラは、「だれが書いたのか?」「なんのために書いたのか?」「だれに観てもらうために書いたのか?」「それを実証するために、わたしたちは、いま、なにをすべきか?」— せめてこの四つのことを論じ合うことは必要です。

さあ、勇気を出して、新しい「歴史総合としてのオペラの美学」の創造に向かいましょう。ご一緒に、どうぞ。

【2023/07/23 都築正道】